

第二十章 超一流の運輸大臣

自民党栃木県連会長に就任

三木首相の後継は福田赳夫と大平正芳の密約が成立して福田赳夫に決まった。この密約は①党務は大平にまかせる、②一年で総裁の座を大平に譲る——ことなどを内容としたものだ。

大平正芳を幹事長に据えた福田内閣は昭和五十一年のクリスマス・イブ、十二月二十四日に発足する。

翌五十二年一月二十六日の自民党大会は三木の「遺言」ともいえる党の体質改善、派閥解消、総裁公選の方針などを決議して閉幕した。その後の一連の党、内閣人事によつて森山は二月一日、党・労働問題調査会長に就任する。森山はこれまで同調査会を動かす実力者だったが、会長には常に倉石忠雄を載いて、倉石を補佐する立場に徹してきた。これ以後の労働問題調査会はまさに、森山調査会の趣を呈していく。

森山はこのあと運輸大臣に在任中の期間を除いて、常に労働問題調査会長をつとめ、亡くなるまでその職にあつた。党的資料によれば、実に通算十一期。これほど長期間にわたつて自民党内の一つの機関の長をつとめたものは他にいない。労働問題に対する森山の熱意と識見は他に並ぶものがないという証左である。

中央での活躍とともに忘れてならないのが地元での森山の活躍ぶりだ。もちろん、政治家としての歩みの中で森山は常に地元の問題解決、発展に心をくだいていた。地元の自民党组织を支えるためにも、森山は持ち前のクソまじめさを發揮し、誠心誠意働いた。

そうした地元での活動の中でも、特筆しておかなければならないのが自民党・栃木県連会長としての仕事だろう。六年八か月にわたる会長在任期間中、森山は地元、栃木県の自民党组织の拡大、充実に大きな足跡を残した。

労働問題調査会長に就任して間もなくの五十二年二月二十七日、森山は第三代の自民党・栃木県連会長に就任した。初代の会長は元衆院議長の船田中、第二代は総務長官、労働大臣等を歴任した小平久雄である。森山の会長就任は前年の総選挙で小平が落選したことによるものだった。

森山が会長に就任した時期は、栃木県連も党中央の近代化、組織化の動きに合わせ、体制の刷新を図ろうとしていた頃だった。体制の改革、近代化の中の重要な柱のひとつは財政問題だった。

森山はまず県連財政の建て直しを実現するために行動を起こした。就任から二か月後の四月二十日、宇都宮市内で第一回の政経文化パーティーを開いたのである。この政経文化パーティーは派

「最大の功績はやはり県連財政の建て直しだったと思います。ちょうど事務局も体制刷新の時期でもありましたので、いろいろ事務局にも配慮していただきました。森山先生の思い出ですか？厳しさもありやさしさもあり、ですね。とにかく筋を通す人柄で、臭いモノにフタをしたりしない方でしたから、確かに厳しかったですよ。それまでドンブリ勘定だった収支なども厳しくチェックされました。でもその反面、女性職員が出産で退職する時などは細かく気遣つてわざわざその女性に声をかけに来たり、お祝いを出したりしてくれたのです。われわれが一生懸命努力してとにかくをやり遂げた時などはちゃんと評価してくれました。たしか第一回目の政経文化パーティーの時でしたが、この時はパーティー開催を決めてから開催までわずか一ヶ月ちょっとしかなかった。時間がないものですからわれわれも死にもの狂いになつてやりました。無事、パーティーが終った時、森山先生が『よくやった』と心からねぎらってくれたのが印象に残っています。

あと想い出すのは五十五年のダブル選挙の時ですね。あの時は森山先生も相当悩まっていた。真弓夫人の参院選への出馬問題で、結局、半年ぐらいかかりました。森山先生自身は真弓夫人の出馬にはあまり積極的ではなかったようです。しかし県連会長としては二議席独占を実現する責任がありましたからね。とにかく栃木県にとって惜しい方を亡くしました。まだまだ働いていただかなければいけなかつたのに」

森山の県連会長就任と前後して栃木県連に入った県連事務局長補佐の佐藤明男は森山の会長時代振り返つてこういう。

党中央から三役はじめ党幹部、閣僚を派遣することを「売り物」に地元の企業等にパーティ券を売り捌く。その売り上げの大半を地元県連に与えることで県連にはじめて独自の財政を確保させたのである。

同年七月の参院選挙で選対委員長として采配を振るつた森山は翌五十三年六月、政経文化パーティーの収益を使って県連の「居城」である「自民会館」の改修を行う。

森山は在任期間中、五十四年の第一回を皮切りに五十四年一月、五十五年三月、五十七年三月と都合四回の政経文化パーティーを開き、県連財政に大きく寄与した。

またこの間に行なわれた各級の選挙では常に陣頭指揮に立ち、着実な成果を上げている。責任ある地位に着いた以上、全身全霊を傾けてその責任を一〇〇%全うするという森山の性格がこの県連会長時代にもいかんなく発揮された。



栃木県連の城「自民会館」。

闇解消問題ともからんで、各都道府県連の財政を党としてうるおしていくことを目的に企画された。

党中央から三役はじめ党幹部、閣僚を派遣することを「売り物」に地元の企業等にパーティ券を売り捌く。その売り上げの大半を地元県連に与えることで県連にはじめて独自の財政を確保させたのである。

森山は六期、六年八カ月にわたって県連会長をつとめ、五十八年十月二十三日に退任した。それが一国一城の主である国会議員や地方議員、しかも選挙ともなればお互にライバルとして激しく争う人たちを県連という立場からまとめあげていく。これは端で見ているほど楽なものではなかつたろう。

二十五年在職で表彰を受ける

自民党は五十二年三月に入つて、党大会での決定に従い派閥の解消を実行しはじめ、三木派は三月三十一日に解散を決定した。だが、現実には派閥は存続し、しばらくの間「旧○○派」という表現を使っていたマスコミはいつの間にか「旧」の字をとつてしまふ。

七月十日投票の参院選挙で、自民党は保革逆転という大方の予想に反して六十二議席を死守した。栃木県では保守乱立で大波乱の末、森山が事務長、船田中が後援会長というコンビで応援した岩崎純三が社会党の戸叶武とともに当選した。同時に行なわれた東京都議会選挙でも自民党が議席を伸ばした。社会党は意外に伸びず成田委員長、石橋書記長は辞意を表明(その後、暫定的に留任)した。十一月二十八日、福田首相は内閣を改造し、一方社会党は十二月三日、飛鳥田横浜市長を新委員長に決定した。

明くる五十三年には三月二十六日、成田の新東京国際空港に過激派が乱入し、管制室破壊事件を起こした。四月九日には京都府知事選挙で二十九年ぶりに保守系候補の林田悠紀夫が当選する。こ



議員在職25年の表彰をうける。(昭和53年3月20日)

うした中で政局の焦点は自民党の総裁公選へと移つて行く。再選に意欲を燃やす福田と「密約」を桶に禅譲を求める大平との水面下の争いは激化し、六月一日には早くも田中派が総裁公選の実現と大平支持を表明した。

この年の三月、森山は衆議院議員在職二十五年を迎えた。この時点で明治以来、代議士を名乗つた延べ人員の累計は一万四千六百八十四人。重複する者を除く実人員は五千百八十四人を数えたが、そのうち二十五年間在職した永年在職議員は森山でわずかに百七十一人目だった。

三月一日、森山は衆議院本会議で保利茂衆議院議長から、永年在職議員として表彰を受けた。その際、森山は次のように挨拶した。

「思えば私たちの年代の者は太平洋戦争の犠牲となること最も大きく、あの戦争でたくさんの友人を失いました。命永らえた私は、若くして散った

友人たちの分まで働かねばならない責務があると痛感いたしました。

あの慘たんたる敗戦の大混乱から祖国を再建しなければならないという一途な気持ち、いまから思いますが、青年の睿智とも言うべきものに駆られて、あえて政治の世界に飛び込みました。以来、戦後政治の幾多の変遷に遭遇し、また、私自身も山あり谷あり糾余曲折を経て今日に至りました。在職二十五年の本日を迎へ、感無量であります。これひとえに、先輩、同僚議員各位を初め、友人知己のご厚情、ご鞭撻のたまものであります。

また、この光栄と喜びは、栃木県選挙区の方々、特に無名の一青年であつた私を育て、終始一貫支持し、苦楽とともにした同志多数の諸君とともに分かるべきものであります。心から感謝の意を表する次第であります。

二十五年を目前にして亡くなつた川崎（秀二）先生のことを思いましても、私は健康にてこの日を迎え、元気に働くことができるありがたさをしみじみと感じます。そして、この内外ともに多事多難な時期に、この榮誉を与えた者の使命の重大さを思うのであります。

今後、一層精励して国民の付託にこたえるため、最善の努力を尽くす所存であることをここに改めて申し述べ、お礼の言葉といたします」

実は森山は在職二十五年になんなんとすることを漠然と知つてはいたが、それがこの年の三月であることを、直前になつて同僚議員から聞いてはじめて知つた。懸命に駆けてきたら、いつの間にか二十五年経つていたというのが森山の実感だった。森山はこの永年在職議員の表彰を受けると同

時に、慣例に従つて自民党の顧問に就任した。

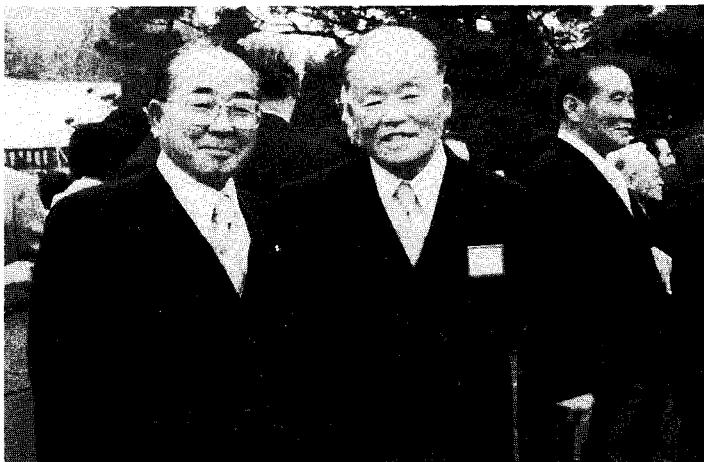
十一月一日、注目の自民党総裁選挙が告示され、福田首相をはじめ、大平、中曾根、河本の四氏が立候補して予備選に突入した。事前の予想では福田、大平の争いになるが、圧倒的に福田有利とみられた。福田首相自身も日米首脳会談や中東歴訪、日中平和友好条約発効といった実績をもとに「世界は福田を待つてゐる」と、満々たる自信をもつて臨んだ。が、結果は裏目に出た。

田中派による猛烈な党员獲得運動に乗つた大平正芳は福田の金城湯池と見られていた東京でも圧勝するなど、全国的に票を集め大差で一位を占め、福田は無念の涙をのんだ。福田は開票日の翌二十七日「天の声にも、時には変な声がある」の言葉を残して国会議員による本選挙への立候補を辞退、十二月一日には大平正芳・自民党総裁が誕生した。

運輸大臣に就任

福田内閣は十二月六日総辞職したが、このとき、「予備選はインチキだ」と中川一郎が閣僚辞任の署名を拒否した。福田陣営にとつてはあきらめ切れぬ痛恨事だつたろう。このときの大平、田中連合に対する福田の怨念がその後、大平内閣不信任案可決などにつながっていく。

あとを受けた大平内閣は幹事長に自派の斎藤邦吉を据えたいとする大平と、これに反発する福田派とが対立、首班指名の衆参両院本会議が流会するという国会史上初の事態を引き起こした。結局、一日遅れの十二月七日、大平の首班指名が行われたが、内閣の前途多難を思わせた。



赤坂御苑の園遊会で、大平首相と。

効問題に關しては三木さんとだいぶスタンスが違うのですが、三木さんも僕のいきかたを見ていたのでしょうか

「お辞儀三人衆」とまでいわれて苦労した森山に

対する三木の恩返しだったのかもしれません。

新内閣が誕生すると新聞は新閣僚の横顔を紹介するのが常だ。五十三年十二月八日付の読売新聞によると森山のプロフィールはこうだ。

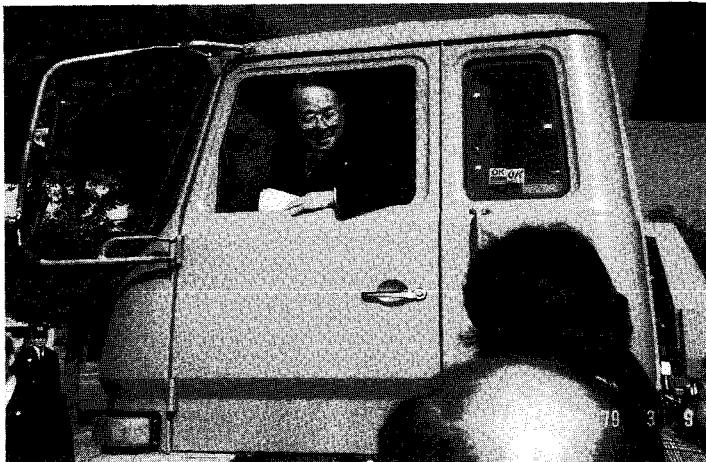
小見出しには「三木派まとめ役で丸み出る」と

あり、本文は――。

「三木氏の側近であり、三木派のスポーツマン」。

今度の総裁予備選では河本選対の事務局長をやつて閣務に専念した。それだけに本人も「もう一度閣僚を」と期待していた。

三木内閣時代の前半には派のために他派工作に動き回つたことから「おじぎ三人衆」といわれ、後半は党幹事長代理として「三木おろし」の防戦



トラックの安全性確認のため試験場に出向いて試乗。(昭和54年3月)

森山運輸大臣の誕生について当の森山はこう推理していた。

「長年、いつしょに労働問題調査会をやつてきた倉石さんが総務会長として組閣本部に入つていての私を推薦してくれたのかもしれません。しかも各派からの推薦名簿をもとにするはずですから三木さんが推してくれたことも考えられます。労

難産の末にまとまつた組閣名簿を手に同夜九時、官邸で記者会見に臨んだ田中六助官房長官は、次々と新閣僚の名前を読み上げた。九番目に「運輸大臣、新東京国際空港担当・森山欽司」と告げた時、一番びっくりしたのは当の森山だった。

下馬評では森山の名前は全くあがつていなかつた。だが、破滅的な財政赤字を抱えた国鉄改革は内閣の急務だった。しかもその再建のかなめは労働問題である。大平が労働の専門家森山を抜擢したのは少しも不思議ではなかった。

森山運輸大臣の誕生について当の森山はこう推理していた。

痛撃した。次いで国鉄役員のボーナス・カット。赤字会社の役員がボーナスを丸々もらうなど言語道断というわけだ。さらに航空管制官などの公務員採用試験を女性にも解放。おまけが泣く子も黙る笹川良一・日本船舶振興会長への勇退勧告に全日空の若狭会長に対する辞任要求と続く。

森山は政治を「常識を貫く」とだと心得ている。それを貫く度胸も兼ね備えている。森山の行動が天衣無縫に見えるのは常識をズバズバ通すからだ。

運輸省で「水を得た」森山はマスコミへの登場頻度も大平首相をしのぐほど。口の悪いマスコミさえ「現閣僚では間違いない『出墨率』トップ」(『現代』五十四年七月号)「二流半といわれる運輸省にあって短期間に大活躍。皮肉でなくて『超一流』の閣僚といっていいだろう」と評価した。運輸行政の中で最大の懸案は国鉄問題だが、整理の都合上、国鉄問題はまとめて後述することにする。

森山運輸大臣の初仕事は私鉄運賃値上げの延期だった。運輸審議会の答申を受けた前任大臣(福永健司)は十二月二十日からの値上げを決定していた。しかし森山は大臣就任の翌日(十一月九日)、土曜日の午後に大平首相の私邸へ押しかけて膝づめ談判し、値上げ延期の了承を得てしまう。「政治は庶民のためという私の信条からすると、一番最初の仕事として値上げはしたくなかった。年末年始をひかえていたこともあつたし、いわばささやかな『お年玉』のつもりでした」(森山)続いて森山は主要造船四十社に大幅操短を勧告した。さらに十二月二十六日、国鉄役員のボーナス半額カットを指示。年が明けた五十四年一月一二日、それまで門戸を閉ざしていた職種への女性



中国鉄道大臣の表敬訪問をうける(昭和54年3月)

に汗水を流し、四年間三木氏を助けてきた。党内

では労政通で知られると同時に、三木派ではめずらしいタカ派といわれたが、最近では『森キン』の愛称で人望を集め、派のまとめ役をやっているうちにぐんと丸みをまし、ソフト・ムードになつた……」

就任にあたつて森山はその抱負をこう語つた。

「国鉄再建をはじめ空前の海運不況や成田新空港問題など直面する課題を前に、身が引き締まる思いがする。国鉄再建は労使関係だけではなく、陸運の中に占める国鉄のウエートが違つてきているので、幅広い見地から取り組みたい」

国鉄再建に森山は一家言をもつていた。今こそ自らの改革路線を進めてみようと森山は堅く心に決めた。

就任直後から森山は次々に方針を打ち出した。まず私鉄運賃値上げ延期を宣言して私鉄経営者を

森山は就任直後、日航の朝田社長に国際線の個人運賃の値下げを強く指示し、実現させた。私鉄にせよタクシーにせよ運賃値上げの理由はコスト・アップである。しかしアップしたコストをそのまま料金値上げで吸収すれば、企業はコスト切り下げの努力をしなくなるというのが森山の理屈だ。値上げを認めなければ企業は必死でコスト・ダウングを図るはずだというわけである。

「申請するのは勝手ですが、当分は認めませんよ」

この件でよく森山は真弓に「『国連婦人の十年』で僕を表彰しないで誰をするんだ」と冗談をいつたそうである。
一月二十三日には六大都市のタクシーチ値上げ申請に対し森山はストップをかけた。

採用しはじめたはずですよ」

女子に門戸を開いているというのは建て前で、実は裏口で三十年間も断わり続けていたのがそれまでの運輸省だった。

「受けにこないんでは」という。たまたま森山真弓のところに上級職試験に受かったので労働省に入りたいという女

の子が相談にきた。ところが聞いてみると、『実は運輸省に行ったら、女はダメだといわれた』といふ。運輸省で人事担当を呼び、『入省希望の女子にだめだといったそなじやないか。君たちが会わないと僕が会う』といったらすぐに採用が決まったわけです。郵政省もこの年から女子の上級職を採用しはじめたはずですよ』

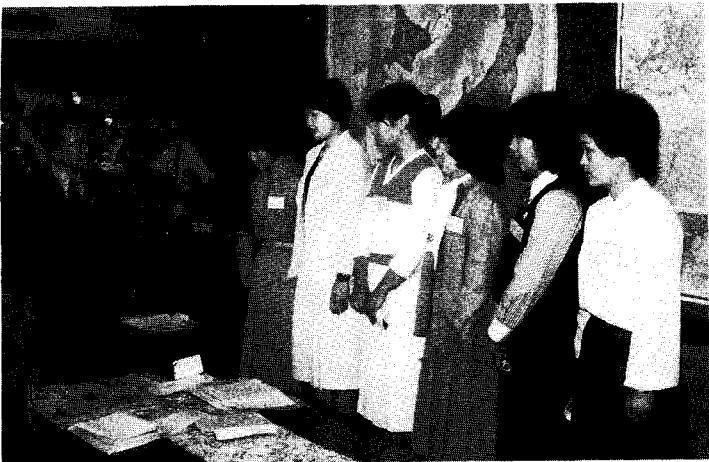
女子に門戸を開いているというのは建て前で、実は裏口で三十年間も断わり続けていたのがそれまでの運輸省だった。

この件でよく森山は真弓に「『国連婦人の十年』で僕を表彰しないで誰をするんだ」と冗談をいつたそうである。
「それもないとはいわないが、いい事はいい事じゃないか」

このフェミニスト振りに「真弓夫人の差し金か」と勘ぐる記者に森山はこう答えていた。

「国連婦人の十年」にモニメントを残したかった」という。

女性の登用に努力。海上保安大学第一期女子学生をげき勵。(昭和54年)



公務員上級職（いわゆるキャリア組）への女性の登用も森山の手柄だろう。

「当時、他省庁は郵政省を除いてみんな女子の上級職を採用していました。森山真弓は昭和二十五年に初の上級職として労働省に入っているのです

料金の認可制度や価格支持政策は本来、価格を公平にあまねくするのが眼目だ。ところが反面でその産業を保護することにもなり、認可料金、支持価格に安住するとその産業がダメになってしまふ場合が多い。農業や石炭がその典型だろう。森山の認識は通りいつぱんの大衆迎合的な“正義の味方”とは違う。問題の本質を正しく見据えていたというべきである。

その後も森山は国鉄幹部との定例会合開始（一月二十六日）、成田横堀要塞に成田新法適用指示（二月五日）、尖閣列島・魚釣島へのヘリポート建設（三月三十日）、鉄建公団の不正経理問題の処理（九月）……と、精力的に動き廻る。

中でも森山らしいのが、当時だいぶ話題になった住田正二事務次官の更迭のほか、船舶振興会の笹川会長に対する勇退勧告とロッキー事件に関連した全日空若狭会長への辞任要求だろう。

森山は三月二十六日、笹川船舶振興会会长に勇退を勧告した。
「前々から考えていたので、友好的かつ丁重に申し上げた。一議員としてはそんなことはいいません。しかし船舶振興会を監督する立場の運輸大臣としては義務ですからね。笹川さん個人が高齢だと在職が長いとかだけではなく、船舶振興会の補助金交付のやり方や、運輸省との関係が問題だと思っていたわけです」

と森山は淡々とう。

なにしろ相手は名うての“怪物”で、政治家の誰も頭があがらないといわれている人物である。別名は「ドン笹川」だ。ネコならぬ獅子の首に鈴をつけるようなもの。周囲は「そんなことをして

「大丈夫か」と心配したし、運輸官僚はビックリ仰天したものである。

しかし本人は誰もが腹の中で思っていたことを素直にいったまで、といった風情である。
いわれた方の笹川会長は相当、頭にきたらしい。

「僕が大臣を辞める前の五十四年の総選挙の直後に、笹川さんがやつてきて“票が減っただろう”というのです。なんのことやらさっぱりわからず“別に感じてません”と答えた。その時は何度も“減っただろう”というのでおかしいなあと思いましたがそれだけ。それが五十五年の衆参同時選挙の時によく意味がわかった。この選挙には森山真弓も参議院栃木選挙区から初出馬したのですが、その選挙の最中に河本（敏夫）さんが通じて笹川さんが“森山真弓は妨害しない”といつてきた。そこでやつと僕の選挙を妨害してたのかと、気が付いたわけです。たしかに五十四年の選挙ではその前より約二万票減っている。年末選挙で投票率も低かつたし、すべてが笹川さんの影響だとは思いませんがね」

全日空の安西社長に対して若狭会長の辞任を要求したときも周囲はびっくりした。「運輸大臣といえ民間企業の人事に口をはさむのはおかしい」との声もあつたが、森山にとつては思ったことを正直にいったまでのことがだった。インタビューした時も、「正論だったと思います。あれだけの事件を起こしたわけですから、なんらかの対応があつてしまるべきでしき」と森山は語っている。

運輸大臣として大活躍していた森山だったがいいことばかりではなかつた。任期も後半にさしか

かつた五十四年九月、鉄道建設公団の不正経理問題が発覚する。会計検査院の調査によつて公団ぐるみのカラ出張が二万八千百三十四件、二億七千三百七十一万円にのぼるほか、ヤミ賞与等、経理の乱脈ぶりが明るみに出されたのである。これは役人天国に対する庶民の怒りを爆発させた。

「あの時は何か月もマスコミに叩かれました。クルマを降りるとテレビや新聞のカメラが待つていて、犯罪者が逮捕された時にやられるのと同じようにライトを当てられ、ストロボをたかれる。いやな感じでしたね。公団や公社というのは『親方日の丸』的な感覚が強いから内部のチェック機能が甘くなるために、いわば野放図になつちやう仕組みなんですね。この問題がきっかけになつてその後はだいぶ内部監査の体制が強化されてきていますがね」

当時、鉄建公団の総裁は副総裁から昇格したばかりの川島広守（現・セントラル・リーグ会長）で、川島はこの問題の責任をとつて総裁を辞任する。

「彼はかわいそうでした。たまたま直前に総裁に就任したばかりにね。そこで官房副長官に、できるだけ早く次のポストを見つけてあげてくれるよう頼みにいつたのです。彼とはその後もよく付き合つてますよ」（森山）

問題は後任総裁の人事だ。

「適任者が見当らないし、あんな時期だからやりたいという人もいない。しょうがないから、大平首相にも話をして国鉄総裁の兼任でいいことになつた。ところがどたん場になつて事務次官が『大臣、法律で兼任禁止になつています』といつてきました。これにはガックリです。いろいろ考

えた末に仁杉さん（仁杉巖・前国鉄総裁）に白羽の矢をたてた。仁杉さんは当時、国鉄から西武鉄道に転出してそろそろ民間の空氣にも慣れてきた頃でした。本人に話したところ乗り気ではないがまったくダメでもなさそう。そこで西武の提義明社長に電話して『すまないけど、彼を鉄建公団の総裁にぜひほしい』といった。このときの提氏はえらかたですよ。即座に『さしあげましょう』と決断してくれた。これで助かりました。

仁杉さんには『頼んでおいてこんなことをいうのもおかしいが、辞表をフトコロに仕事をしていくれ』といった。仁杉さんは見事に鉄建公団をたたき直してくれました。当時は会うと『苦労だね。まだ辞めないのでかい』なんていうのが挨拶代りでした。ところが今度は国鉄の高木総裁が辞めることになつたために、後任難でまたまた仁杉さんが引っ張り出された。仁杉さんは静岡高校で僕の先輩に当たるのです。友人として彼には悪いことをしたと思っています。せっかく平穀無事に民間の中に入つてとけ込んでいた仁杉さんを嵐の中に引っ張り出した張本人は僕なのですから」

森山は持ち前の全力投球精神で精一杯運輸大臣のつとめを果たした。

森山は振り返つてこういう。

「仕事をしたなあという自己満足があります。女子の採用や尖閣列島へのヘリポート建設なんて地味だけど意味があるでしょ。天衣無縫にやつたと思いますね」

森山がやり残したと残念がるのは成田空港の第二期工事の着工と国鉄問題である。手を付けたら結着がつくまで満足しない。外から見ればこれほど仕事をしてもまだ足りないのかと思うほどだ。

森山はどこまでも仕事に食欲な男だった。

森山運輸大臣の思い出

日本空港ビルディング社長 高橋 寿夫

私は森山運輸大臣に海上保安庁長官としてお仕えした。一年に満たない期間であったが、いろいろの思い出がある。森山大臣は役人たちから何となく恐しい人という印象を持たれていたという人がいるが、私の感じは全くちがう。

森山大臣は、きちんとしたことを好まれた。朝の出勤時間のことから、業務上の報告などすべてのことについて、役所の人たちが大臣に対して裏表なく誠実に仕えることを求めておられた。それをいわゆる豪放磊落という姿でなく、生じめな几帳面なスタイルで求められた。それがこちら側にとつては堅苦しいと受け取られたのかも知れないが、私もどちらかというと性格的にそのようなところが多いので、少しも異和感を持つことはなかつた。

気むづかしくて仕えにくい大臣でしようと外部の人にいわれることがあったが、私はいつもそれを否定し、お仕えするコツをのみこめば全然そんなことはないのですよと答える

のが常であった。そのコツというのは、要するにまじめに誠心誠意こちらの分を尽すということである。宮仕えとして至極当たりまえの心がけではないか。

そういうわけで私は森山大臣にいろいろとお引き立ていただいた。親父が年上の兄貴といつた気持ちで、大臣をおやめになつたあとまで何かと声をかけていただいた。決して気の長いほうの方ではなかつたから、ぱんぱんといわれることもあるが、そんな時でも眼鏡の奥の目はやさしく微笑んでおられることが多かつた。そしてそのお目の何という澄み方であったことか。純真な中学生のような澄んだ目と申しては失礼になろうか。中学生がそのまま大きくなつたような一面がお人柄のなかにあつた。それが大臣の大きな魅力であつた。

仕事の第一号は、女子海上保安官の採用問題であつた。ご就任後間もない頃にご下問を受け、至急検討しますとお答えをしながら、私はお受けする気持ちをすでに固めていた。それというのも、私は当時よく山を歩いていたが、ワングルのパーティーなどに出会つた時、女性リーダーの持久力や統率力を目のあたりにして、男と女との能力に差はないとうことを確信していたからである。

翌日、さっそく大臣にご返事申し上げたところ、たいへん喜ばれたのを今でもよく覚えている。これが突破口になつて、気象庁や航空管制の職場も女性に解放されることになつていつた。巡視船に乗り組んで哨戒警備にあたるかなりの荒仕事が女性に解放されたのだ

からということで、ほかの職場での反対論者を説得するお役に立つたと思う。

そしてこのことは、当時労働者の婦人少年局長として、男女の雇用平等という大きな課題に取組んでおられた真弓夫人のお仕事を側面からお手伝いする結果となつた。この地上で誰よりも真弓夫人を愛しておられた森山大臣のお喜びはとても大きかつたと思う。このことがきっかけとなつて、真弓先生にお会いするたびに暖かいお言葉をかけていただく光栄に浴している次第である。

第二に印象に残つているのは、海洋二百海里時代にあつて、日本の領土や領海の確保という大事な問題に積極的に取組まれたことである。

海上保安庁には旧海軍時代から引継いだ水路部という機構がある。ここは日本周辺の海域を測量して正確な海図を作るなどの大事な仕事をしている。例えば伊豆七島の南の方には米粒のようない島が沢山ちらばつてゐるが、これらの島の領有を確實にしておかないと何時外国の測量船がやって来て繩張りをこしらえてしまうかも知れない。それを防ぐために、絶海の孤島の先の孤岩にヘリコプターから吊り下げ着地して、水路測量原標というものを埋め込んで來るのが有効な手段なのである。大臣はこのことに大きな関心を持たれ、その実施を督励されたのであつた。

そのもつと大がかりなものは、沖縄の南西にある尖閣列島である。ここは本来日本の固有領土であるのに、戦後無人になつたため、中国がこの島に関心を示し、武装漁船を繰り

出してデモンストレーションをやってから、まだいくらも経っていなかった。

大臣はこの領土の確保を図るため、早く「実効的支配」の証しとなる施設を建設すべきだとされた。ちょうど沖縄開発庁がこの島の総合調査をする予算をとったので、その調査を行う学者の島への輸送をするために、島に海上保安庁の簡易ヘリポートを作るということにした。外交的にもかなり微妙なものを含むのでちゅうちょする向きもあったが、大臣は先見性の高いご決断で、ぜひ早くこれをやりたまえと指示され、無事にこれを実施した。

あの近海は大陸棚で、海底にはぼう大な石油資源が眠っているといわれる。島の領有については今後なおさまざまのやりとりがあるかも知れないが、過去における日本領有の歴史的事実の上に、海上保安庁という国の機関のヘリポートの存在というものが、将来の国際交渉場裡に図り知れない大きな意味を持つて来ると思う。その時に国民は昭和五十四年当時の森山大臣の大きな遺産のありがたさをあらためて理解することと思う。

公私ともどもお世話になった森山大臣を急に喪って、まさに天を怨みたいほどの気持ちである。私のささやかな思い出を書きつらねて心からご冥福をお祈りする次第である。

森山大臣 想い出すままに

日本空港コンサルタンツ社長 松本 操

森山欽司先生とお呼びするよりは、やはり、「森山大臣」と呼ばせていただくほうが私はずっと親しみ易いし、あの当時のことが懐かしく想い出せるような気がする。

昭和五十三年十二月七日も終わりを告げる頃に、大平首相を首班とする「大平内閣」閣僚の認証式が行われたようだ。当時の日記を繰ってみると、「8日前0時半登庁、同2時退庁」と書かれている。私などには極めて難解であった大平内閣組閣の経緯は、専門家の筆にまつとして、「大臣初登庁」の恒例行事を待つ我々としては、何ともいらいらさせられたことを、この一行の記録は思い出させてくれる。ともあれ、このようにして、大臣と私の「関係」は始まったのであった。ほぼ一年後の昭和五十四年十一月九日に大臣をお辞めになるまで、何かとご叱責を受けながらも、お陰さまで何とか航空局長の重責を果たし得たこと、そして、幸いなことにも、その後も引き続いだりとご指導をたまわる機会を得た（私が昭和五十六年に空港公団に参つてからも、特に、自民党の労働問題調査

会会長のお立場からそれとなく「指導を受けた」ことを、今更のように『これも亦』縁であつたのかなあ』と想い起こす次第である。

さて、大臣がご就任当時、私にとつて大きな問題としてのしかかっていたものの一つに「成田空港」があつた。この年の五月二十日によつやく開港をした成田空港は、「二期工事・の推進」を最大の目標に、農業振興策等の地元対策を推し抜けつつ、同時に航空燃料輸送用パイプラインの工事の促進等にも取組んでいたのである。取分けて、「反対同盟」対策は、すべての懸案の根幹に横たわるものであつた。昭和五十四年七月十六日に大臣が行われた「地元農民に対する呼びかけ」は、この分野に於けるエポック・メイキングなものであつたといえる。残念ながらせつかくのこの動きも、當時ようやく胎動をみせ始めていた反対同盟側における内部確執など、相手側の事情に災いされて顕在的効果を得ることはできなかつたが、潜在的には相当の打撃を先方に与えたことは、その後反対同盟がたどつた経緯にかんがみても明らかのことであつた。この時の具体的な状況は、未だ公開をはばかるところであると思うが、大臣室での、あの緊迫したやりとりは、なかなか忘れえない。

話題が急にとんでもしまつけれども、五十四年の八月に大臣のお供をしてアメリカに出張をしたことがある。大臣はたびたび外国旅行をされて、いわば旅慣れておられるようにお見受けしたが、私は、久し振りのこととて、しかも大臣の随行であるから、大いに緊張して、開港一年余の成田を飛び立つたのであつた。ことの起りは、日米航空交渉において、

なかなか埒があかないことから、「航空局長、一度アメリカに行つてこい」に端を発したまま大臣がブラジルに行かれる、こととなつたのに合わせて私共がお供をすることになつたと記憶する。本来の交渉の方はさて置いて、ニューヨークでは、『ウォルドーフ・アストリア・ホテル』などという「たいへんな」ホテルに泊まつたことは、まさに大臣の「大臣らしさ」の現れであつたと思われてならない。アムトラックに乗る機会を得たのも、大臣隨行の余祿であつたかと思うが、その時の「旅のガラクタ」は今もなおどこぞに仕舞いこんである筈である。その折りに、大臣の写真のご趣味をつくづくと承知したのであつたが、私も下手の何とやらで、写真は（写真機はとうべきであろうか）好きな方であるところから、その折りに持参したペンタックスのオート・110が、いささか大臣の興味をそつたのではないかと今でも思つている。（正確な形式番号を思い出せないが、確かコダック製の、円盤式フィルムを使用するコンパクト・カメラをいち早く入手されて、写真機会館の事務所におじやました時に、試し撮りのモデルにされたことを覚えている。その後も、『謹呈・森山欽司』と裏書きされた大臣の作品を何度か戴いたものであつた）。

アメリカ出張の少し前のことだったかと記憶するが、米国国務省の高官が大臣の事務所を非公式に訪ねて来たことがある。元国際課長の私としては、当然通訳を致すべきところであるが、鏗びついた道具はものの役に立ちようもなく、なんと、当時確か労働省の婦人少年局長をしておられた令夫人（もちろん現在の参議院外務委員長である）を煩わしたの

であった。「なんともたいへんな局長であった」というほろ苦い思いと共に、大臣の、ある面での「おおらかさ」が懐かしい重ね写真となつて浮かび上がってくるのである。

航空局は、航空交通管制業務を実施するなど、ある点では現業官庁である。その一環として、航空保安施設の検査用機材として、ガルフ・ストリーム／IIという新鋭ジェット機を持つている。我が国最初の民間航空用練習空港である下地島空港の開港式に大臣が臨席されるに当たって、このガルフ・ストリームに試乗されることになった。この発想そのものが、いかにも「大臣らしい」ものであつたが、四万フィートの高空を一気に下地島空港へと飛んだのも、また、「大臣らしい」フライトであった。随行の我々も、大いに浩然の気を養つたのはいうまでもない。

これに関連して忘れられないのは、管制官等に初めて女性を採用することになつた経緯である。航空局長としては、「保守」と「進取」の狭間に揺れ動きながら、委員会まで設けて議論を重ね、ついに大臣のご趣旨に従つたのであつたが、当時の一期生は今や押しも押されもせぬ中堅になつていると聞いている。

ディレギュレーションと言う言葉を聞くようになつて久しい。我が国においても、いわゆる「四五／四七体制」なるものは解体されて、国際線複数企業体制の時代に突入しているが、大臣の時点は、まさにその「はしり」であつたように思われる。今では、「ファイル・アップ・ライト」といつても知る人は少ないとと思うが、あの頃は、極めて重要な検討テーマ

マであつた。何度も大臣室からのお呼び出しがあって、何回このテーマについて大臣と議論をしたことか。『君は、いろいろと知つてはいるようだが、大事なことは、適確な判断だよ』とお叱りを受けたのも、その頃のことだったと思う。ご退任の時まで、この問題は続いたのであった。詳細はもはや思い出せないが、大臣の「引継ぎ書」は、この問題に関する、おそらくは「空前絶後」ともいえるほどに委細を極めたものであつたと記憶する。何事にもせよ、先ず客観的な態様を判断した上で、理論的に突っ込んでゆき、これと決めたことは飽くまでもその実現・実行を追求するという大臣の仕事振りを目の当たりにできたことは、私にとってこの上ない幸いであった。

文字通り「思い出すままに」少しばかり筆が滑り過ぎたような気がする。当時のメモが見つからないままに、記憶に頼つて書き連ねたので、あるいは多少の誤りがあつたかも知れない。けれども、その強烈な個性が私に与えた印象は、決して消え去ることが無いであろう。この小文が、森山大臣の知遇を得た一人の男が捧げるレクイエムとして受け取つていただければ、幸いこれに過ぎるものはない。